

中古和文の要説明疑問表現

—『源氏物語』を資料として—

磯 部 佳 宏

一 はじめに

国語史における各時代の疑問表現の形式、およびその史の変遷に關しては、既に先学の研究により、その概略は明らかになってきている。

阪倉篤義氏は、疑問表現の形式を「要説明」「要選択」「要判定」の三種類に大別し、その史の変遷を考えておられるが、このうち「要説明」の疑問表現については、上代文献では次の諸形式がみられ、それらは基本的には中古に入っても受け継がれるとされる。¹⁾

疑問詞(……)カ—。

—ヤ疑問詞。

疑問詞—ゾ。

また、山口堯二氏は、上代から現代に到る疑問表現の推移を、「特定方式・不定方式」および、助詞「カ・ヤ・ゾ」の「係り(文中)用法・結び(文末)用法」という分類により概観しておられるが、阪倉氏の「要説明」疑問表現に相当する、疑問詞を用いる「不定方式」については、中古の場合、一般的には次の諸形式がみられる。

中古和文の要説明疑問表現 —『源氏物語』を資料として—

るとされる。²⁾

疑問詞のみを有する方式

「カ」の係り用法

「ヤ」の係り用法

「ゾ」の結び用法

「疑問詞のみを有する方式」が、特に一形式として示されている以外は、阪倉氏の場合と一致していることになる。

これらのうち、助詞「ヤ」を用いる形式については、疑問詞が必ず助詞より下に現れることから、山口氏がこの「ヤ」は「疑問文の主題を提示している」と見られる³⁾と言われるように、他の形式とは明らかに性格が異なっていると考えられる。

これに対して、「疑問詞(……)カ—。「カ」の係り用法

と「疑問詞—ゾ。「ゾ」の結び用法」の二形式の間には、何らかの性格の違いがみられるのだろうか。柳田征司氏は、「竹取物語」の会話文における疑問表現の形式を調査しておられるが、「要説明」の疑問表現については、「問い」「疑い」「反語」の用法別に分類すると、次のようになるとされる。³⁾

問い 疑問詞(……)カ……。

疑問詞……ゾ。

疑い 疑問詞カ……。

疑問詞……ゾ。

反語 疑問詞(……)カ……。

疑問詞……。

つまり、「疑問詞(……)カ——。」と「疑問詞——ゾ。」の両形式は、いずれも「問い」としても「疑い」としても使用されていることになり、この両形式が「疑い」「問い」という基準により使い分けられていたわけではないらしい。これは、柳田氏が比較対照されている室町時代の『天草版伊曾保物語』では、「疑問詞——ゾ。」が「問い」専用の形式となり、一方、「疑い」には「疑問詞——カ。」の形式がもっぱら用いられるというように、「問い」と「疑い」とで、表現形式が異なっているというのとは事情が違う。それでは、「疑問詞(……)カ——。」と「疑問詞——ゾ。」の両形式には何か別の基準による使い分けがみられるのだろうか。この点に關して、柳田氏は次のように述べておられる。

この二つは、要判定の場合の二つの形式とちがって、文法的機能差をもっていないかと思われる。二つにちがいがあつたとすれば、前者が柔らかいひびきの表現、後者が強いひびきの表現といったようなものだったのでないかと思われる。

この稿では、中古和文における、要説明の疑問表現の二形式、

「疑問詞(……)カ——。」(「カ」の係り用法)と「疑問詞——ゾ。」(「ゾ」の結び用法)との性格上の差異について、「源氏物

語」を資料として考察してみたい。(用例検索には「源氏物語大成索引篇」および「源氏物語用語索引」を利用した。本文引用の際は「日本古典文学全集」(小学館)によるが、私意により表記を改めた箇所がある。また、心中思惟の部分にはへへを付した。)その際、両形式との関連で、「疑問詞——。」という「疑問詞のみを有する方式」についても問題になってくると考えられる。そして、特に、中世になると、むしろ要説明の「問い」の形式として標準化していくと考えられる「疑問詞——ゾ。」の形式の、中古和文における表現効果について考えてみたい。

なお、「疑い」「問い」という用語の概念について確認しておく必要がある。次に示す阪倉篤義氏のような理解が一般的であると考えられる。

疑問表現には、その名のごとく、(a)〈疑〉の表現と、(b)〈問〉の表現とがふくまれている。(a)は、ただ自らの内心の疑惑を表現し、ないしは、断定を保留して不定のままに一往それとして叙述するものであつて、相手に問いかけるというよりは、むしろ、内に向かい、それだけで自足するという面がよい。断定保留という意味で、これは推量表現にたつたり、さらには詠嘆表現にむすびつくのである。それに対して(b)は、疑問点を示してその説明をもとめ、ひとつの判断についてその成立・不成立の判定をせまるなど、明らかに相手への依存、ないしは働きかけを意図するものである。

もっとも、阪倉氏も、これに続けて、実際には「両者の中間には種々の段階があり、(b)のなかに、自らに問うというかたちのもの

があつて、明確な分別は困難な場合が多い。」と述べられている。また、山口堯二氏のように「疑い」と「問い」の原理的な連続性について、根本から考え直した見解もみられるが、ここでは、「疑い」「問い」の内容について、非常に便宜的に、次のように考えておきたい。つまり、会話文において、対話相手に対して解答を要求しようとする姿勢のみられるものを「問い」の表現と考え、それ以外はすべて「疑い」の表現と考える。したがって、会話文で用いられていても、相手に解答を求めているとはみられない場合は「問い」の表現とは考えないし、心中思惟における用例は、自問自答の色彩の強く感じられる場合も含めて、一応はすべて「疑い」の表現に分類する。

二 「疑問詞(……)カ」の形式

『源氏物語』において、要説明の疑問表現に関わる文中用法の係助詞「カ」は、全部で36例みられる。(和歌および詩句等の引用に基く用例は除外した。また、「いかでか」「なかか」の形で使用されているものは、全体をひとつの単位とみて用例数には含めていないが、前稿で扱っているのを、参照していただきたい。ただし、用例は適宜引用する。)このうち、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接している場合が約半数の16例もみられ、これはむしろ「ニカ」でひとつの形式とみるべきものと考えられるので、次項でまとめて扱うこととし、ここでは、まずそれ以外の場合についてみることにする。

表1は、「ニカ」の形式を除き、文中用法の「カ」が使用されて

いる要説明の疑問表現の文末の形を用法別にまとめたものである。狭義の疑問表現よりも、むしろ反語表現になる例が多いが、これは「いかで」「など」の場合も、係助詞「カ」の下接した「いかでか」「なかか」の形では、反語表現に片寄る傾向がみえたことと同様であろう。特に、文末に推量の助動詞「ム」が存在する場合、反語の例が目立つが、ここでは狭義の疑問表現の場合についてのみ考察する。なお、表中の「∅」は、文末に推量の助動詞や終助詞などの、言語主体の主體的表現と考えられる語が含まれていない場合である。

文末に推量の助動詞が存在しない形式は、一般的に会話で使用され、対話相手に解答を要求しようとする態度のみられる「問い」の表現である

表1

	ム	ケム	ラム	マシ	バシ	ムトス	ス ム ム	カム ベラ	ゾ	ベキゾ	∅	省略	計
疑	18	14	5	1	2		1	2		1	1	8	53
問	3		4		1			1		1	14	7	31
反語	70			2	9	1			1		2	10	95
計	91	14	9	3	12	1	1	3	1	2	17	25	179

と考えられる。

(1) (源氏) 「……さては、(あなたハ) いづれをとか思す」と

(紫の上ニ) 聞こえ給へば、 (玉鬘) (常夏)

(2) (源氏) 「いとうたて、ゆゆしき御事なり。(あなたハ) などてかさまでは思す。……」と (女三の宮ニ) 聞こえ給ふ。(柏木)

(3) (内大臣) 「うたた寝はいさめきこゆるものを、(あなたハ) などか、いともはかなきさまにては大殿籠りける。……」など (雲居雁ニ) のたまひて、 (常夏)

(4) (薫) 「(あなたハ) などか御声をたに聞かせたまはぬ」とて、 (大君ノ) 御手をとらへておどろかしきこえたまへば、 (総角)

(1) が純粹に解答を要求しているのに対し、(2) (4) には、むしろ非難・恨みなどの言語主体の情意が濃厚であるが、いづれにしても対話相手自身の思考や行動に関して、明確な応答を要求していると考えられる。

(5) (源氏) 「(夕顔ハ) 年はいくつにか物し給ひし。……」と (右近ニ) のたまふ。 (夕顔)

(6) (夕霧) 「五節はいつか内へ参る」と (童ニ) 問ひ給ふ。 (少女)

(7) (中宮) 「……いかやうにてか、かの人は亡くなりし」と (薫ニ) 問はせ給ふを、 (手習)

これらは、第三者が話題であるが、言語主体としては、対話相手が事実を知っていると確信して、解答を要求している場合であると考えられ、実際に対話相手は応答をしている。

文末に推量の助動詞が存在する場合は、次のように心中思惟で用

いられ、「疑い」の表現である例が多い。

(8) (親たち) 「……、(明石の上ガ) いかなる歎きをかせん」と思ひやるに、 (明石)

(9) (匂宮) 「いづれかいづれならむ」と、うちもおかず御覽じつと、 (稚本)

(10) (源氏) 「……、(入道ハ) いかなる願をか心に起こしけむ」とゆかしければ、 (若菜上)

(11) (良清) 「……、いつのまにか舟出しつらむ」と、心得がたく思へり。 (明石)

(12) (匂宮) 「いかでか、これをわがものにはなすべき」と、心もそらになりたまひて、 (浮舟)

これに対して、文末に推量の助動詞が存在する形式が、会話文で使用されているのはどのような場合であろうか。

(13) 弁参りて、「いとあやく、中の宮はいづくにかおはしますらむ」といふを、 (総角)

(14) (薫) 「……、いかやうなる、たちまちにいひ知らぬ事ありてか、(浮舟ハ) さるわざはし給はむ。……」と (右近ニ) のたまへば、 (蜻蛉)

(15) (右近) 「……、……、(匂宮ハ) いかでか聞かせたまひけん、ただ、この二月ばかりより、訪れきこえさせたまひし。……」と (薫ニ) 聞こえさす。 (蜻蛉)

(13) は、(8) (12) のような、言語主体の心中思惟における「疑い」がそのまま言葉になった独自の表現であり、(14) も基本的には言語主体の「疑い」の表明である。ただ、対話相手に対する間接的な「持ち

かけ」の効果は認められよう。しかし、⑩のように、挿入句的に用いられている場合には、言語主体には解答を求めようとする意識は全くないと言つてよい。

⑩(源氏)「……二条院にも同じすぢにて、いづくにかたがへん。……」とて、大殿籠れり。(帚木)

⑪(女三の宮)「恥づかしうこそはあらめ。何事をか聞こえん」と、おいらかにのたまふ。(若菜上)

これらの助動詞「ム」は言語主体の意志を表していると考えられる。独自の表現の場合もあれば、対話相手に応答を要求しようとする姿勢の感じられる場合もみられる。

⑫(夕霧)「……。(あなたハ)いかやうにかおきて思し召すらむ」と(源氏三)申し給へば、(幻)

⑬(源氏)「(あなたハ)この御返りは、いかやうにか聞こえさせ給ふらむ。……」など(前斎宮二)聞こえ給へど、(絵合)

⑭阿闍梨のもとより、(文)「年改まりては何事かおはしますらん。……」など(中の君二)聞こえて、(早蕨)

これらも、言語主体の「疑い」の表明という形をとっているが、話題の人物と対話相手とが一致しているため、⑭のような間接的な「持ちかけ」ではなく、むしろ実質的には対話相手に対する「問い」であると考えられよう。山口堯二氏は、事実に基づく応答をめざしている質問表現において、推量語が使用されている場合には、「質問相手に敬意を表す尊敬語や丁寧語との共起がめだつ」ことを指摘して、「相手に応答を求めるその対他的な要求性を和らげて」「質問表現を婉曲化」しているのだと説明しておられるが、本来は

「疑い」の表現であるものが、会話文で、話題の人物と対話相手とが一致するという条件のもと、文脈上「問い」の表現になりうるのだとみることもできよう。

現代語の場合にも、

。いかがお過ごしですか。

。いかがお過ごしでしょう(か)。

を比較すると、推量の助動詞を含む後者の表現の方が、婉曲でやわらかい感じがするのは共通の感覚であろうか。なお、現代語で、

。あなたは、どうしてそんなことを考えているのですか。

。あなたは、どうしてそんなことを考えているのでしょうか。

を比較すると、前者の方が理由を尋ねる単なる「問い」と感じられるのに対し、推量の助動詞を含む後者はむしろ批判的否定的色彩を強く帯びてくるが、

⑮(僧都)「まだいと行く先遠げなる御ほどに、(あなたハ)いかでか、ひたみちにしかは思したむ。……」と(浮舟二)のたまへば、(手習)

⑯(薫)「……。(あなたハ)などが、今まで、かくもかすめさせたまはざらん」とのたまへば、(宿木)

などの場合も同様に考えられるのではないだろうか。

以上、文中用法の係助詞「カ」を用いる要説明の疑問表現の場合、一般的に、文末に推量の助動詞を含まない形式は、会話文において「問い」の表現として使用されているのに対し、推量の助動詞を含む形式は、心中思惟で「疑い」の表現として使用される場合が多い。しかし、この形式が会話文で用いられている場合には、基本

的には言語主体が自己の「疑い」を対話相手に表明している表現と考えられるが、結果的には間接的で婉曲的な「問い」の表現とみるべき性格のものもある。中古和文では、このような表現を好んで用いているという事実は、逆に、強い態度で解答を要求しようとする、明確な「問い」の表現を、むしろできるだけ避けようとする傾向が強かったのではないかと思わせる。

三 「疑問詞——ニカ」の形式

前述のように、「源氏物語」において、要説明の疑問表現に関わる文中用法の係助詞「カ」全346例のうち、約半数の167例が、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接して「ニカ」の形式をとっている。表2は、その結びの形を示したものであるが、「ニカ」以下が省略されて、実際には「ニカ」の形で文が終止している例が圧倒的多数である。

表3は、この形式の使用されている場面を示したものであるが、約半数は心中思惟で用いられ、言語主体の「疑い」の表現と考え

表2

あ	ら	む	37
あ	り	け	11
待	ら	む	4
待	り	け	4
お	は	し	1
お	は	す	1
省	カ	止	109
(「ニカ」略め)			
計			167

表3

地	の	文	27
会	話	文	69
心	中	思	69
手	紙	文	2
計			167

られる性格のものである。

㉓春宮のおほちおとどなど、へいかなる事にか」と思し疑ひてなんありける。(桐壺)

㉔(源氏) へめでたしとおもほしみにける御かたち、いかやうなるをかしきにかと、ゆかしう思ひ聞こえ給へど、(絵合)

㉕(夕霧) へうちいで聞こえてけるを、(源氏) いかにも思すにかと、つつましく思しけりとぞ。(横笛)

㉖(浮舟) へ(薫ガ) いかにもでない給はんとするにかと浮きて怪しうおほゆ。(東屋)

このように、この「ニカ」終止の形が、心中思惟で「疑い」の表現として使用されることが多いのは、やはり「ニカ」で完全に文が完結しているのではなく、推量の助動詞を含んだ形が省略されているという意識が働いているためであろう。表2に見るように、実際の結びの明らかな場合は、「あらむ」「ありけむ」など、すべて推量の助動詞の含まれている形である。

㉗大夫も、へいかなる事にかあらむ」と、心得がたう思ふ。

(若紫)

㉘菊の、……、いかなる一本にかあらむ、いと見どころありてうつろひたるを、(宿木)

㉙手習にも言ぐさにもするは、いかに思ふやうのあるにかありけん。(竹河)

㉚・㉛のように、地の文での用例では、比較的結びの明らかな場合が多い。

「ニカ」の上接語には、㉜・㉝のように体言の場合と、㉞・㉟の

ように用言の連体形の場合があるが、後者の場合は、次のように「ニカ」を除いても、疑問詞のみを有する疑問表現として、形式的には成立するはずである。

(25) うちいで聞こえてけるを、いかに思す。

(26) いかにもてない給はんとする。

しかし、この形は、文末に推量の助動詞が含まれないため、完全に「問い」の表現と感ぜられる。つまり、この形式に「ニカ」が付加することにより、以下に省略されていると考えられる「あらむ」「ありけむ」のような推量の助動詞を含んだ形式が同時に想起されて「疑い」の表現へと変化していると考えられよう。

したがって、この「ニカ」の形式が、次のように会話文で「問い」として使用されている場合も、「ニカ」の下には推量の助動詞を含んだ形が意識され、婉曲的な「問い」の表現になっていると考えられよう。

(30) 御息所、「いかなる御文にか」と、さすがに(少将ニ)問ひ給ふ。

(夕霧)

(31) (薫)「……。(あなたハ)いかやうなる御なやみにか」と(匂宮ニ)聞こえ給ふ。

(浮舟)

(32) (中将)「忍びたるさまに物し給ふらんは、誰にか」と(妹尼ニ)問ひ給ふ。

(手習)

(33) (源氏)「……、清げなる屋廊などつづけて、木立いとよしあるは、何人の住むにか」と(御供ニ)問ひ給へば、

(若紫)

(34) (中の君)「……、(あなたハ)いかに推し量り給ふにか」と(北の方ニ)のたまふ。

(東屋)

つまり、これらの「ニカ」は積極的な「問いかけ」を意味しているのではなく、むしろ形式上は省略されているとみられる推量表現を想起させて、「問い」の表現を間接的にし、やわらげる効果を持っていると考えられよう。

しかし、それならば、会話文で「問い」の表現として用いられている、このような「ニカ」には、対話相手に対する「問いかけ」の効果は全くないのであるうか。(30)と(34)の例を、次のように、疑問詞のみを有する形式で、文末がはっきりと推量表現になっている形と比較してみると、やはり明らかな相違が感じられよう。

(30') いかなる御文ならん。

(31') いかがやうなる御なやみならん。

(32') 誰ならん。

(33') 何人の住むならん。

(34') いかに推し量り給ふならん。

つまり、(30)と(34)のような「ニカ」は、対話相手に対する積極的な「問いかけ」の指標ではないとしても、係助詞「カ」が文末に存在することに、一文が疑問表現であることを明確にし、間接的にはあるにせよ、対話相手に対して「問いかけ」を示唆する表現効果は充分に持っているのではないかと考えられる。この「ニカ」の「問いかけ」としての効果は、次のように「ニカ」が推量の助動詞に下接している場合、いっそう明らかであろう。

(35) (僧都)「……。(浮舟ハ)いかなるあやまちにて、かくまではふれたまひけむにか」と(薫ニ)問ひ申したまへば、(夢浮橋)この場合、⁽¹⁰⁾「ニカ」のない形では、完全に言語主体自身の「疑い」

の表現であり、「ニカ」が付加することにより、対話相手への「持ちかけ」の効果が生まれていると考えられよう。

中古には、要説明の疑問表現において、「カ」が文末用法として用いられないことについて、山口堯二氏は、「ゾ」との関連で次のように述べておられる。

疑問点の指示性にすぐれた「か」は疑問詞の下での係り用法には引き続き勢力を保っているが、文全体を一旦とめにした文末の、それだけ文意全体を確認するようになる位置には、より広い内容についての指示確認辞とも言うべき「ぞ」が「か」をおしのけて標準化しているのである。

確かに、「カ」は「ゾ」と比較して、文全体をまとめる力が弱いため、単独で文末用法にならずに「ニカ」の形式をとるのだと考えられる。文全体をひとまとめにし名詞化しているのは、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」であり、「カ」はそのようにしてまとめられた形にはじめて付きうるのである。その意味で文末の「ニカ」の形式は、「ニカ」全体で、むしろ文末用法の「ゾ」と比較しうる性格のものとも言えよう。しかし、「ゾ」が完全に文の完結を明示するのに対して、この「ニカ」の形式の場合は、実質的には「ニカ」で文が終止していても、やはり推量の助動詞を含んだ結びの形を想起させる。したがって、会話文で「問い」として使用されても、対話相手に対する「持ちかけ」の効果は示しながらも、決して相手に対して強い態度で解答を要求する表現ではないと言える。このことにおいて、好んで多用される理由ではないだろうか。

四 「疑問詞——ゾ。」の形式

表4は、「源氏物語」における、助詞「ゾ」の文末用法を用いる要説明の疑問表現について、その使用場面を示したものである。

会話文で使用されている例は、次のように大部分が「問い」の表現と考えられ、言語主体が対話相手に対して解答を要求しようとする姿勢を明確に示しているものだと考えられる。

表4

文	1
文	119
文	59
文	1
計	180

- (36) (老女) 「かれはたれぞ。何人ぞ」と問ふ。(蓬生)
- (37) (源氏) 「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。……」と(右近三) 問ひ給へば、(玉鬘)
- (38) (律師) 「そよや。この大將は、いつよりここには参り通ひ給ふぞ」と(御息所三) 問ひ申し給ふ。(夕霧)
- (39) (匂宮) 「昨日は、などいとくはまかでにし。いつ参りつるぞ」など(大夫の君三) のたまふ。(紅梅)
- (40) (中の君) 「いかなる御心地ぞ」と、(浮舟二) たちかへりとぶらひ聞こえ給へば、(東屋)
- (41) (薫の隨身) 「まうとは、何しにここにはたびたびは参るぞ」と(使三) 問ふ。(浮舟)
- (42) (妹尼) 「……いかなれば、かくはたまふぞ。いかにして、さる所にはおはしつるぞ」と(浮舟二) 問へども、(手習)

これらの例は、前述のように「ニカ」の形式を用いたり、文末に推量の助動詞の存在する間接的で婉曲化された「問い」の表現を好む中古和文にあつては、むしろ強い態度で明確に解答を要求しようとする「問い」の表現であると思われる。言語主体と対話相手との関係をみると、身分の上位者から下位者に対して使用されている場合が多いのもこのことと関係があると考えられる。もつとも、(40)や(42)のように、対話相手に対する敬語と共起している場合もあるし、次のようにむしろ下位者から上位者に対して使用されている場合もみられないわけではない。

(40) 右近来て、(浮舟ニ)「殿の御文は、なごて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゆしく忌み侍るなるものを」、
(浮舟)

(41) この人々は、「……、……、残り多かる御世の末を、いかにせさせ給はんとするぞ。……」と(浮舟ニ)言ひ知らすれど、(手習)

しかし、これらは、対話相手に対する非難を含んだ、非常に強い表現であると考えられる。

(42) (夕霧)「……」と、たはぶれに言ひなし給へど、(雲居雁)「何事いふぞ。おいらかに死に給ひね。……」とのたまふに、
(夕霧)

のように、本来用いられるべき敬語も使われぬ、激高した場面での用例がみられることも注目される。

対話相手の存在しない心中思惟で用いられている場合は、もちろん「問い」の表現ではないが、単なる「疑い」の表現というよりも、むしろ、言語主体の感情表現的性格が強い。

(43) (源氏)へなどて、かくはかなき宿りは取りつるぞ」と、くやし

中古和文の要説明疑問表現 — 『源氏物語』を資料として —

さもやらん方なし。
(夕顔)

(47) (兵部の君)へこの人をも、いかにし奉らむとするぞ」とあきれ
ておほゆれど、
(玉鬘)

(48) (女三の宮)へはては、いかにしつるぞ」と、あきれで思さる。
(若菜下)

(49) (中将)へあさましう、こはいかなる事ぞ」と思ひ惑はるれど、
(帚木)

(50) おとどの君、……、へこはいかなるべき事ぞ」と、悲しく口惜し
ければ、
(柏木)

(51) (大君)へいかにするわざぞ」と胸つぶれて、
(総角)

一般に疑問表現には言語主体のさまざまな情意が含まれている場合が少なくないが、しかし、これらの例は、疑問表現に付随している情意というよりも、言語主体の強い感情を表す、むしろ本来的な感情表現と考えるべき性格のものであろう。そして、その感情は、波線部からも明らかのように、後悔、驚き、あきれ、困惑、悲嘆などの、いわばマイナスの感情ばかりである。このことは、前稿ですでに考察した、次のような「いかで」が「ゾ」と呼応する場合も同様であった。

(52) (尼君)へ……。さるにては、かの若草を、いかで聞いたまへる
ことぞ」とさまさまあやしきに、心乱れて、
(若紫)

(53) (源氏)へいかで隔てつる年月ぞ」とあさましきまで思ほすに、
(明石)

つまり、助詞「ゾ」の文末用法を用いる要説明の疑問表現は、一般に、会話文では対話相手に強い態度で明確に解答を要求しよう

する「問い」の表現として用いられ、一方、心中思惟では言語主体の強い感情表現として使用されているのであるが、両者にはどのような関連が考えられるのだろうか。

ところで、終助詞の「ゾ」は、中古においては、一般に「ム」「ケム」「ラム」などの推量の助動詞には下接しない¹³⁾。つまり、要説明の疑問表現において、文末に推量の助動詞を用いるか、「ゾ」を用いるかは、いわば二者択一の関係にあることになる。前述のように、推量の助動詞を用いる場合は、基本的には言語主体の「疑い」の表現であり、多くは心中思惟で用いられており、会話文で用いられ「問い」と考えられる場合も、それはあくまでも間接的で婉曲的な性格のものであった。これに対して、文末用法の「ゾ」を用いる疑問表現は、「ゾ」が推量の助動詞とは共起し得ないことから考えて、推量の助動詞を用いる疑問表現とはむしろ正反対ともいふべき性格を持っていたのではないかと思われる。つまり、基本的には「問い」の表現としての性格が強いと考えてよいのではないだろうか。

もっとも、中古和文においては、「カ」の文中用法で文末に推量の助動詞を含まない形式が、前述のように、むしろ「問い」の標準形として数多く使用されている。しかし、この形式は、推量の助動詞が文末に存在しないという、いわば消極的な理由により、「疑い」ではなく、「問い」の表現になり得ているのだとも言える。これに対して、「疑い」の指標とも言うべき文末の推量の助動詞と明確に对照される形で、たとえそれが「ゾ」の本来の機能ではないにしても、いわば「問い」の指標的印象を与えて顕在しているのが、要説

明疑問表現における文末の「ゾ」なのではないだろうか。そのため、「疑問詞——ゾ」の形式が、「疑問詞(……)カ——ゾ」の形式よりも、強い態度で明確に解答を要求しようとする場合の「問い」の表現として使用されるのではないだろうか。

さらに、文中用法の「カ」を用いる形式はむしろ反語に片寄り、狭義の疑問表現の場合には、「疑問詞——」という、疑問詞のみを有する形式がある。「疑問詞——ゾ」と「疑問詞——」¹⁴⁾とは完全に「ゾ」の有無のみの相違であり、前者の文末の「ゾ」が、後者の形式と比較して、「問い」の指標としての印象を与えたことは十分に考えられる。

このように、「疑問詞——ゾ」の形式における、文末の「ゾ」を、推量の助動詞と対照的な性格を持つものと考えたと、この形式が心中思惟で用いられている場合も、それは単なる「疑い」の表現ではなく、むしろ「問い」の表現としての性格を持つことを示そうとしているのだとは考えられないだろうか。もちろん、心中思惟の場であるから、対話相手に対する「問い」ではなく、言語主体の内面への「問いかけ」、いわゆる自問自答的表現である。心中思惟における、この「ゾ」の文末用法による疑問表現が、単なる「疑い」の表現というよりも、むしろ強い感情表現となるのは、言語主体の激しい自問自答が何度も繰り返されるためであろうと考えたい。

阪倉篤義氏は、この「疑問詞——ゾ」の形式について、

これは、上代では、不定ないし疑いの表現にちかく、ゾは単にそれを強調する助詞とも見られるが、平安時代にはいと、右のよ

うな疑問詞の性質の変化もあって、訓点資料などでは、ほとんどこれが、「要説明」の表現形式として固定してくる。和文系においても、院政・鎌倉時代には、ほぼ固定したものになったと認めてよいであろう。(傍点引用者)

のように考えておられるが、中古和文においては、他の表現形式と共用される中で、特定の表現効果を示していたと考えるべきであろう。

注

- (1) 阪倉篤義「文法史について——疑問表現の変遷を一例として」(『文章と表現』へ一九七五年、角川書店)所収
- (2) 山口堯二「疑問表現の推移」(『日本語疑問表現通史』へ一九九〇年、明治書院)所収
- (3) 柳田征司「室町時代の国語」(一九八五年、東京堂出版)一一一ページ以下。
- (4) 「……や……。」「の形式と「……か。」「および「……や。」「の形式のこと。
- (5) 注(1)に同じ。
- (6) 山口堯二「疑問表現の原理」(注(2)の前掲書所収)
- (7) 拙稿「不定語「いかで」の構文的性格——意味用法・表現性をめぐって——」(『山口国文』第11号へ一九八八年)
- (8) 主目的表現の語、客目的表現の語の分類は、北原保雄氏に從う。(北原保雄「日本語助動詞の研究」へ一九八一年、大修館書店)、『日本語の文法』(一九八一年、中央公論社)

(9) 山口堯二氏は、質問表現において推量語を伴う場合のひとつとして、「少納言よ、香炉峰の雪、いかならむ」(枕草子)のような例を示し、「話手が質問の相手にも想像による応答を求めていると解せる」と述べられている。(山口堯二「疑問表現の推量語」(注(2)の前掲書所収))

(10) 北原保雄氏によると、「ベシ」「マジ」以外の推量の助動詞は、中古においては、一般的に断定の助動詞「ナリ」には上接しない。したがって、この例はやや疑問が残るが、「源氏物語大成」により校異を見た限りでは、別本系統に「ふれたまひけるにか」の形がみえる以外は、青表紙本系統、河内本系統すべて、引用本文と一致している。推量の助動詞「ム」「ケム」「ラム」が、「ニカ」の形式に上接している例は他にはみられないが、「ニカ」がむしろひとつの形式として独自の機能をはたしていたと考えるならば、「ナリ」単独では下接しえない推量の助動詞にも下接しうる可能性は否定できないのではないかと思う。

- (11) 注(2)に同じ。
- (12) 山口堯二「疑問表現の情意」(注(2)の前掲書所収)には、疑問表現に担われるさまざまな情意が豊富な用例とともにまとめられている。
- (13) 「ベシ」に下接する例はみられるが、「ベシ」の場合は、注(10)のように断定の助動詞「ナリ」に上接する場合があるなど、他の推量の助動詞とは、大きく性格が異なっていると考えられる。

(14) 「不定詞」または「疑詞」ともいうべき性質「から」「(疑問詞)」としての性質「へ」の変化。